

第1WG は第3次教育改革の中身を2回(第1回:4月2日, 第2回:4月9日)にわたって検討した。第1回では、「組織改革検討のための話題提供」—神山素案(3月12日 第2回組織改革構想委員会・資料1)と「教育改革のグランドデザイン策定のための素材」—奥田メモ(3月7日)を叩き台とし、基軸教育と専門教育の在り方、教養教育の実施体制、基礎教育の位置づけ、教育方法などの課題を自由討議した。第2回では、第1回の議論を受けて各委員がレジメを作成し、それぞれのアイデアを深化させた。

第1WG の委員は大学教育創造センター設置WG の構成メンバーとほぼ同一であったため、後者のWG で6回にわたり議論してきた高知新大学の教育像が活かされ、それに沿った教育創造のイメージを膨らませることができた。

教育改革のグランドデザインを描くとき、3月19日第3回組織改革構想委員会・資料2で記載されているように、まず、これまでの高知大学の教育改革の実績、課題、成果に対する自己点検および外部評価を総括し、同時に、社会が現在と将来にわたって大学教育に求める知識、能力、人材像を的確に把握しなければならない。その上で、高知新大学の資源と教育の目標を踏まえ、新しい独自の大学教育の在り方を設計していく必要がある。

第1回WG は、3月19日第3回組織改革構想委員会・資料2における本学教育改革の必要性と方向性を概ね妥当とし、それを前提にして教育改革の特徴をどこに置くかを重点的に議論した。以下のまとめは、新しい「基軸教育」を文字通り基軸とする第3次教育改革の骨子である。

高知新大学改革将来構想(案)

二 教育改革のグランドデザイン

1. 第2次教育改革の総括

2. これからの大学教育

- ・教育環境の変化—大学の役割と評価
- ・社会と学生が求める知識、能力、人材像
- ・高知新大学のリソースとポテンシャル
- ・学生の自律性と教育創造

3. 教育改革の必要性

- ・高知新大学の教育(基礎・専門)の達成目標と学生の入口出口
- ・実績と課題

- ・大学教育（学生の学び）の構造の理解
- ・目的・手段・効果に関する論理構築
- ・カリキュラム設計と教育方法
- ・実施体制

4. 高知新大学の大学教育

○現状の整理

要るもの：学生中心の大学教育創造

- ・学生自身による自己実現と成長が実感できる記録
- ・知識の獲得と活用からなる相互促進的拡大スパイラルの環境形成
- ・実社会へ向かって駆動する統治能力とキャリアの形成

あるもの

- ・学びの道具とスキルの獲得を基本とする基軸教育の実践
- ・全学的な教養教育の共有と担保
- ・専門教育の体系

不足しているもの

- ・学生の学びへのモチベーション
- ・教員の教育に対する責任と喜びの意識感覚
- ・学びと教育の場（多様性）と、教学の相互交流

○改革の基本コンセプト

- # 初年次教育の徹底重視および高学年次への発展
- # 少人数 TBL 演習授業の重点的導入
- # 教養・専門二元論の払拭とダブルメジャーの制度化，およびトランスファーパス
- # 自主的リカバリー授業としての基礎科目およびアドバンストバイパスの敷設
- # 外国語教育方法の抜本的転換
- # 専門科目の精選および大学院教育との共有・接続

○カリキュラムの骨子

* 基軸教育

1年生に対しては集中的に実施。「新大学学」を中心に据え、その周りに配置する「日本語技法」「情報処理」「英会話・大学英語入門」「健康科学」から得られるスキルと基本知識を「新大学学」のなかで十分に活用・駆使する。「新大学学」を、「日本語技法」などのその他の科目と密接にリンクさせるため、複数の授業をフレキシブルに結合させる（授業内容を併せて行う）。

「新大学学」「基軸 TBL」の単位配当は通常講義より大きくする。

・「新大学学」＝入論（Pre-Bachelor Thesis＝PBT）

少人数（1 教員 3 名程度の学生）で 2 terms（通年 4 + 4 単位）にわたって実施。1st term では、学生の所属学部の教員が（Web で）提示するメッセージを学生が見、希望する教員を選択し、課題設定、問題解決、成果発表、論文作成を含む授業を演習・実習形式で行う。2nd term では、他学科または他学部の教員が担当する授業も選択できる。授業は 1st term と同様に TBL 形式で、論文作成まで行う。また、学生自ら学習プランを作成し、定期的な学習成果のまとめを別途レポートとして提出する。

学生の知的好奇心に火をつける機会。教員と学生の相互の切磋琢磨（FD）。学びの意義、学びの姿勢を学ぶ。異分野体験から学問分野の広さを体感。副専攻への動機付け。「日本語技法」「情報処理」の技能の迅速的应用により、さらに技術の上達が加速。

1 年次にして成果を形にする。学生自ら考え、解決した活動が記録として残され、引き続いて実施される「基軸 TBL」および卒業研究論文の記録と比較できる。学生が大学 4 年間の成長の過程を自ら認識できる喜びを得ると同時に、教員にとっても自分の指導した学生の客観的教育実績となり、教育の喜びにつながる。→学生の達成度評価および教員の教育評価における価値観の転換。

・「基軸 TBL」＝準卒論（Case Study）

「新大学学」の継続・発展とし、卒業研究につなげる。教育方法は TBL 形式、each term または集中授業で 6 単位。開講実施方法は、（1）1 年次に選択しなかった教員の授業を選択する；（2）2，3 年次学生対象の特別選択科目；（3）演習専属教員集団（大学教育創造センター専任教員＋支援教員、および新教育組織教員）が 2，3 年次生対象の「基軸 TBL」授業を担当する。

授業は開始当初から準正課教育とリンクさせ、例えば、演習終了時点で、一定規模の成果公表会を学生自身が開催し、優秀な成果を挙げた学生に award を授与する。

・「基軸専門英語」「基軸専門情報処理」

専門分野に応じた言語・情報処理能力の発展。

*基礎教育

概論はすべて専門科目へ移行するか、廃止する（他の専門科目で教員免許を取る）。

（1）やりなおしのきく補習的科目に位置づける。主専攻専門科目を理解するための基本的知識を得る目的だけではなく、副専攻へ向かうための学習起点として有効となる。

（2）社会人の、または健全な市民としての心身（スポーツ，芸術），普遍的知識と世界観を涵養する科目。

* 専門科目

教養科目区分を廃止し、専門科目を全学に開放する。双方の教育区分で内容の重複していた複数の授業を専門科目にまとめ、開講コマ数を縮減する。また、いままでに視野の広い教養教育科目を担当してきた努力と実績を活かし、その授業を単に廃止または専門化するのではない形で、専門科目として開講する。

従来の概論と専門コア、および専門専攻の一部を他学部他学科の学生も受講するようにする。異分野の学生が修得した専門科目は幅の広い見識かつ高度の教養となる。主専攻以外の修得科目を積み上げることで、副専攻が成立する。

専門科目を他学部他学科の学生に開放することにより、また、受講学生の必要度（評価）により、授業内容の明確化と改善を進め、授業を担当する学部学科を越えて授業の精選と共有を図る。

* 外国語教育の抜本転換

基軸英語では、コミュニケーションとリーディングにおける習熟度別クラス編成を原則とする。学生一人ひとりが入学時のプレースメントから卒業まで達成度カードをもち、語学能力の向上を認識する。

達成度が高い、または、留学、国際交流を目指す学生に外国語のアドバンストコースを設定する。

外国語教員組織を改組するとともに、外国人教師を充てた「応用言語メディア教育センター（CALLME）」を設立する。資格取得や専門英語、プレゼンテーションのために、学生自身のモチベーションドライブのマルチアクセス自学自習システムを構築する。

外国語の正課教育を国際交流に関する準正課教育とリンクさせる。

以上